

アトリエ 琉游舎 だより 234号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年7月1日発行



水無月の夏越の祓する人は ちとせの命のぶといふなり

- 夏越の祓は、6月の晦日、すなわち6月30日に行う大祓の行事です。「大祓」は古代から行なわれた民俗信仰に基づく年中行事のひとつで、毎年6月と12月の晦日に、人々の罪や穢れを祓い清めるため、宮中や神社で行われる神事です。このうち6月の神事が「夏越の祓」です。
- 室町時代に一条兼良が著した有職故実書「公事根源」には茅の輪をくぐるとき「水無月の夏越の祓する人はちとせの命のぶといふなり」という和歌を唱えると伝えています。
- 「夏越の祓」の代表的な行事に、「茅の輪くぐり」と「人形流し」という風習があります。「茅の輪」とは、チガヤなどの植物でつくられた、大きな輪のこと。神社の鳥居や境内に茅の輪を設け、そこをくぐることで半年の罪や穢れを祓い、残り半年の無病息災や厄除け、家内安全を祈願するものです。「人形流し」とは、神社から授与された人形で体をなで罪や穢れを祓う行事です。人形に自分の罪や穢れを移し、身代わりとして神社に納めるのです。身代わりとなった人形は、神事で川や海に流したり、篝火で焚いたりして清めてもらいます。
- 「煩惱熾盛、罪惡深重」の自覚をもって生きなさいとの親鸞の教えは、人間洞察を極めたものです。しかし自覚はしたとしても煩惱熾盛の毎日は「わかっちゃいるけどやめられない」のが私たちです。だからせめて年二回は茅の輪くぐり、人形流しをして、罪と穢れを祓うことがその自覚の代わりとなると考えたのかも知れません。何かに自分の罪惡深重を預けて流してもらうことは、その自覚がある証拠と考えればこれも私たちの生きる知恵なのでしょう。
- 世界は今責任転嫁の花盛りです。各地で起きている戦争は、相手が悪いからそれを糾すための戦争だという論理がまかり通っています。ミサイルを最初に打ち込んだ方の指導者は、「自分たちは相手の煩惱を自覚させるためにミサイルを打ち込んだ」と一様に言っているように見えます。その言動が己に「煩惱熾盛、罪惡深重」の自覚がないことを図らずも露呈しているのです。自覚無き煩惱のなすり合いは、私たちに災厄をもたらす元凶です。だから私たちは「分かっちゃいるけどやめられない」との自覚は持ち続けなければならないはずなのです。

写経会 7/5 (日) 13時半 読書会 7/7・7/21 (火) 13時半

夜寝る前には翌日着ていく服を枕元に置き、教科書や学習用具をランドセルに入れてから布団に入ったものです。それがいつまで続いてきたか記憶にありませんが、少なくとも学校に通っている間は、その様な習慣があったことは間違いありません。朝起きてから慌てないように、忘れ物をしないように、遅刻をしないように、あるいは天気や体調も含めて自分で判断して翌日に備えなさいとの、子供に対する親心、躰のひとつだったのでしょう。お陰で今でもその躰の通り、何事も事前の準備をして、当日の用件に備える習慣が染みついてます。ですから今まで、遅刻や、忘れ物や、準備不足で大失態を犯すことも無く、無事68歳まで過すことができてきました。たとえその時、もし何らかの瑕疵があったとしても自分で判断して準備したことなので、その場での簡単なりカバーは可能ですし、何よりも失敗は次に繋がる大事な経験と考え、反省して二度と同じ失敗を繰り返さないよう対策を練るはずです。失敗をしなければ何が成功なのかも分らないでしょうし、自ら改善しようとする意志も起きないでしょう。「失敗は成功の母」とはよくいったものです。

赤ん坊に自らの選択判断を求めることは無理な相談です。保護なしでは赤ん坊は生きていけません。子供を育てるとことは、判断（保護）の柵を親が家族へ学校へ地域へ社会へ世界へと拡げていき、最後は親の保護の柵を解放することではないでしょうか。成長に従って親はその時々判断を少しずつ子供に委ねていくことが親の愛情であり、子の自立の過程だと考えれば、いつまでも親が柵の解放を渋ることは、子供の判断力と社会性を奪い、結局親がいなければこの社会の中で生きていけなくなってしまうでしょう。通常は親が先に死にます。そうすると今まで親の柵の中で生活してきた年の嵩んだ子供たちは、柵から解放されて自由を得たと喜ぶのか、新たな柵（保護）を求めて彷徨うのか、自ら柵を作りその中に閉じこもるのか。

親の柵を親子問題の範疇と考えるのは大きな間違いです。社会の最小単位の家族は、社会全体を映す鏡でもあるのです。私には現代の親子関係が、昭和に機能していた親子関係から明らかに変質していると思われるのです。毎度の昭和の話ですが、あの時代に私が親から受けた愛情と躰が、どのように受け継がれているのか、あるいは受け継がれなかったのかを検証することが今、必要なのです。それは現代社会は、どのような柵を必要としているのか、そしてそれが私たちの選択の自由にどのような影響を及ぼしているのかを考えることになるからです。選択判断は私（個人）の所有する数少ない自由です。それを他者に委ねることは、私の心身の帰趨を他者に委ねることと同じと考えます。社会の柵は私たちの自由を奪う可能性がある一方、社会（国）が一定の大きさの柵を決めて、その中で国民を保護しているとき、私たちがそこに不快や不便を感じなければ、人はその柵の中に安住することを望むことでしょう。しかしその柵の中に安住しきった末に、柵が移動してしまったり、柵が何らかの力で破壊されてしまったとき、私たちの社会はそれに対応して、柵を作り直すための判断力と選択肢を持ち続けていることが、今現在果たしてできているのでしょうか。

他者に判断を委ね、その保護の中で判断停止（ストレスゼロ）の環境を生きることは、心地よく安全なことと思いがちですが、それは冷たい水につかっていたカエルが徐々に温度を上げられている変化に気づかず、茹で上がってしまう「ゆでガエル」のようなもののなのです。これから私が例示する天気予報の話はあまりにも些細な話と感ずるかも知れません。しかし何か違和感を感じたとき、茹で上がる前に湯から飛び出す判断能力を失ってはならないためにも、私が最近感じた些細な違和感について話します。私が小学校に通う頃から欠かさず見ていた番組に夜7時のニュースと直前の天気予報があります。その頃の予報はせいぜい明日の天気まで、気温は今日の最低と最高気温だけでした。ただ天気図だけは気圧も含めて結構丁寧に説明されていたので、この天気図だと雨が降るのか、気温が高いか低いかなど、翌日の天気変化はなんとなく分ったものです。それがいつの間にか週間の天気や気温の予想、雨や発雷の確率まで教えてくれるようになりました。雨雲予想で、どこに雨雲があり、いつ降り始めいつまで降り続くか、や雨量まで予想してくれます。この至れり尽くせりの天気予報に、最近朝7時に今日一日の服装のおすすめ「日中は半袖で過ごせますが、夜は冷えるので羽織るもの一枚持参、傘は持っていった方がよい」など、持ち物や服装まで指示してくれる、もはや余計なお世話の予報です。小学生の時に親から教えられた立ち振る舞いは、親の柵から解放されて初めて、自分のものとなるのです。それは親の慈悲の故です。そのお陰で、私たちは社会のいろいろな柵を自分の意志と選択で乗り越えられる力を身につけることができました。私が天の邪鬼だからかも知れませんが、あえて穿った見方をします。社会の様々な親切の柵がお為ごかしに見えてしまうのです。しかし私はゆでガエルになりたくないのです、言います「今日の持ち物と服装くらいは自分で考えさせてくれ！」と。

親の保護の柵から解放されても、社会は可視化されていない柵だらけです。親の保護から解放された私たちは、社会の柵に囚われたり、つまづかないように、お釈迦様の慈悲の光が様々な柵を照らして、歩むべき道、越えるべき柵を指し示してくれるのです。子供には親がお釈迦様です。お釈迦様は私たちの親です。私たちはお釈迦様の子供です。親もお釈迦様とともに慈悲の光を我が子に注いでくれているのです。「慈悲」とは、仏や菩薩、人が他者の苦しみを抜き、安楽を与えようとする深い思いやりの心です。「慈」は楽を与える、「悲」は苦を抜く、この二つを合わせた「慈悲」によって私たちは生かされているのです。

親の慈悲から仏様の慈悲へ我が身を委ねることは、子も親も勇気がいることでしょう。しかし仏様の慈悲に身を委ねることは、何事も囚われないありのままの自由を手に入れることだと私は考えています。ゆでガエルを作る社会の柵に安閑とするのではなく、私は仏様の慈悲に身を委ねた自由に安住したいと考えます。